

『稿本天理教教祖傳』70頁に、

かぐらづとめは、元のぢばに於いて勤める。十人のつとめ人衆が、かんろだいを圍み、親神の人間世界創造の働きをそのまゝに、それへの守護の理を承けて、面をつけ、理を手振りに現わして勤める。

とあります。

さて、この文中の“ぢば”の説明は次章にありますので後述することとし、また、かぐらづとめそのものの説明は他に多くの論述があるのでそこに譲るとして、この稿では、おぢばでのおつとめと地方・教会でのおつとめの違いと関連性についての考察を試みます。

先ず、両方のつとめの違いを形の上から見てみますと、かんろだいつとめが、“10人の人衆がかぐら面をつけての立ちづとめをした後に12下りのておどりをする”のに対して、教会でのおつとめでは、“6人の奉仕者で面をつけずに座りづとめをしてから12下りをつとめる”という点が違います。詳細に申せば、おぢばでの“かぐらづとめ”では、獅子面2個、天狗面1個、男子顔面3個、女子顔面4個と背中に背負う鯨1個、亀1個が使われるのに対して、地方の教会ではいかなるお面も使わないということです。(その他細かく言えば、おぢばと地方の教会では男鳴物の並ぶ順序が違います—地方と笛の位置を近づける必要からだと考えられます)

この点について、明治22年に、「郡山分教会所に御かぐら道具を御ゆるしの願」、「兵神分教会前同様御神楽道具願」、「遠州山名郡分教会所に於て、御神楽面を開筵式に付御ゆるし何」という3つの「おさしづ」の伺いが続けて出されていますが、いずれの場合にも、鳴物はぢばと同様で許すけれども、「面はぢばかぎり」と、地方でのおつとめでのお面の使用は一切許されていません。

それでは、他のものはぢば同様でよいとされるに、なぜ“面の使用はぢばに限る”と言われるのか？ その理由について、二代真柱の著書『ひとことはなし その三』には、「お面は人間元始りの理に関係あり、人どうとついたもの、他の道具は神前に飾ってもよろしいが、お面はぢばのみに限るとのお話であります。」と記されています。

では、“お面は人衆についたもの”とはどういう意味か？ それについての筆者の悟りは以下の通りです。

かぐらづとめの10人のつとめ人衆は、親神様の人間創造の働きを再現している立場です。つまり、つとめ人衆は、(本来的には)十柱の神様の魂の持ち主なのです。しかるに、一方、現実的には、つとめ人衆は人間であり、親神様の思し召しに添わない心を遣うこともあります。極端に言えば、

十人のなかに三人かたうでわ
火水風ともしりそくとしれ (6号21)

と、「おふでさき」にもあるように、元は親神様のお心になつて“つとめ人衆”として期待された方でも、その後の心遣い・行いによっては、親神様に見放される可能性もあります。

つとめ人衆は、人間心を全くなくして、親神様のお心に副つ

てつとめる立場なのですが、しかし、人間はあくまで人間であつて、人間が神になることもまたできません。その神になれない人間が、神の化身になるために面をつける。親神の自己限定としての十柱の神の働きを今に現す役を担うために、つとめ人衆が面をつけるのだと考えられるのです。

さて、(少し本題から逸れますが…) かく申しますと、かぐらづとめの人衆は神の化身であり、教会のおつとめ奉仕者は人間だとするならば、両方のおつとめの歌/言葉が同じなのはおかしいのではないかと。親神の化身が何故に「あしきをはろうて」と唱え、自らの胸のほこりを払う手振りをするのか？ 神の化身には胸のほこりなどないはずで、あしきをはらう必要などないではないか？ と言う人があるかも知れません。

しかるに、その点については、次のような例を考えれば、説明がつくのではないかと思います。たとえば、子供が親に対して、何か謝らねばならぬことやお礼をいうべきことができた。または、親に特別な願いごとをする必要ができた。けれども、子供が幼いので、親にどう謝ればよいのか、どうお礼を言うのか、どう願うのかが分からない。あるいは、分かっているのに、変に意地を張ったりして素直に言葉に表すことができない。そういう場合に、たとえば母親が、自分も親であるけれども、子供の立場になる。そして、「さあ、お母さんも一緒に謝るから、お父さんに『ごめんなさい』と言おうね」とか、「お母さんと一緒に『ありがとう』を言いましょうね」などと、親が子供を励まします。母親には謝る理由もお礼を言う必要も何ら願うこともないのに、子供のためにそうするのは。親だからと上から目線で見ているのではなく、子供のレベルに合わせたところで、子供のとるべき態度を率先して示してくださる。それが、つとめ人衆が、「あしきをはろうて…」と自らが唱え、自身の胸を払う動作をする所為だと思ふのであります。

まとめて言いますと、かぐらづとめは、親神の“人間創造の働きと、今も、世界・人間身の内に守護されている十全の働き”を象徴する10人のかぐら面をつけた神の化身が、子供たる人間に成り代わって、人間の心のほこりが払われ、親神の守護が遍く世界に行き渡るように祈念するものです。そして、地方の教会で6人の奉仕者での座りづとめをするのは、“六台はじまり”と言われる“人間創造に直接関わる六柱”(くにとこたち、をもたり、月よみ、くにさづち、いぎなぎ、いぎなみ)、また“身の内を直接守護する六柱”(くにとこたち、をもたり、くにさづち、月よみ、くもよみ、かしこね)を象徴する6人が、人間の立場で、教会に出張られている親神を通して、ぢばでのつとめによって現される守護を分け与えられるように祈念するので。人間創造と世界・身の内の守護の全体像を10人で表現されるのがかぐらづとめであり、その十全の守護の中の人間の身の内に限定したところを象徴するのが、教会での6人の座りづとめである。この人数の違いと面の有無に象徴される形の違い・意味合いによって、おぢばでのおつとめと地方・教会でのおつとめの違いと関連性を知ることができるのであります。